

沙門はいんのCL閑話 52

—胡子無鬚—

だるまさんのヒゲ

遠藤博因 hakuin@river.ocn.ne.jp

今回も禅の逸話の中から一つお話させていただきます。

惑(わく)庵(あん)和尚は言った
「西から来た達磨にはなぜ髭(ひげ)がない」



今回は皆さんもよくご存知の達磨さんについての内容です。お話は、たった一言で終わりなのですが、この一言に禅の真意が詰まっています。達磨さんと言えば、日本では縁起ものとして、七転八起の赤い張子の達磨を思い浮かべます。実はこの達磨さんは実在の人物で、六世紀にインドから中国へ禅を伝えた禅宗の開祖なのです。ですから、日本の禅宗の寺院でも必ず達磨大師の像が祭られています。達磨大師の風貌は赤い衣を身にまとい、長い髭をたくわえ、眼光の鋭い大きな眼をしています。その達磨大師は中国で禅を広めるため、少林山の洞窟で九年間かたときも動かず座禅をしていたと伝えられています。そこで現在、世間で親しまれている起き上がりこぶしの赤い達磨さんは、荒廃していたある寺院が復興のため、不屈の精神にあやかって、縁起ものとして張子の達磨を作り始めて全国に広まりました。

そこで、今回のお話ですが、本来なら立派な髭をたくわえた達磨さんのことを、どうして「達磨にはなぜ髭がない」といっているのでしょうか。普通に考えるなら全くとんちんかんで矛盾した話です。しかし、

何度となくお話しているように、禅門においては、修行者に「有る」とか「無い」といった二元的な次元を超越したところの真実を参究※しろと問いかけます。言い換えれば、髭のあるなしにとらわれず、真の自己を参究しなさいというのが禅の修行の目指すところなのです。なかなか難しい話ですね。(季刊CL44号2007.4) ※参究=参禅して仏法の神髄を探究する

実は約七年前にも季刊誌でこの逸話を紹介させていただきました。新たな読者もいるかと思われまので、序文はその時のものを引用してあります。

今回はレイノルズ先生の心の働きについてのコメントを紹介します。心は、世界の意味づけをし、分別や仮説、説明を作りあげます。また感情や不安感、深く考え込こむことも心の作用です。それはそれで構いません。心がなすことですから。私は心がこのように作用する原因について語ることもできます。しかしそれは単に心の働きそのもの以上に説明のための説明、理由づけのための理由づけにしかありません。それは終わりなき堂々巡りです。

一息ついて五感(視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚)をフルに使って周りを見回してみてください。そうしているあいだ心が働いていることが見て取れるでしょう。それが現実の心の動きなのです。『Gateless Reflections by D.K.R 4』


確かになぜ、なぜの説明は納得しない以上、際限のない説明の上塗りになってしまいます。世界の意味づけの説明、仮説や説明は哲学的で議論に終わりがありません。なぜ人は不安になるのかの説明も精神医学的、心理学的見解はたくさんありますが、CL的には、誰もわからないことなのです。まさにこころ(…)、コロコロ転がっていくイメージで誰も捕まえることのできない代物といった感じなのです。

もちろん心が働いていることは確かです。もっと現実的なところに心の働きを見て取りなさいというのがレイノルズ先生のコメントであり惑(わく)庵(あん)和尚の意図しているところではないでしょうか。

今、自分の口の周りやあごのあたりを手で触った人がいますか？触って見たらどうでしょうか？五感をフルに使って感じてみてください。それがCLであり禅なのです。

今回も誌面にて皆さんとお会いできるご縁に感謝して

合掌
(富山県南砺市井波 CL インストラクター)

 [目次へ戻る](#)